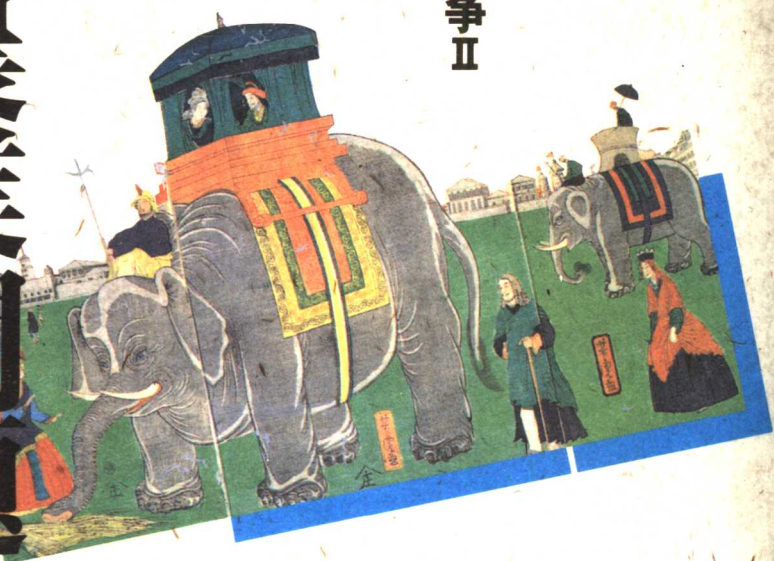


日本資本主義論争Ⅱ

世界農業問題  
の構造化

河西 勝



河西 勝 日本資本主義論争Ⅱ

世界農業問題の  
構造化



---

目  
次

世界農業問  
題の構造化

---

編者まえがき

第1部 プチ・帝国主義論争

- 10 高橋亀吉「日本資本主義の帝国主義的地位」  
45 猪俣津南雄「資本主義日本の帝国主義」  
52 野呂栄太郎「『プチ・帝国主義』論批判」  
57 高橋亀吉「現段階論の諸迷説に止めを刺す」

第2部 現段階論争

- 64 猪俣津南雄「没落への転向期に立つ日本資本主義」  
76 野呂栄太郎「日本資本主義現段階の矛盾と恐慌」  
88 猪俣津南雄「マルクス主義の前進のために」  
100 野呂栄太郎「『没落への』転向期に立つ理論家」

### 第3部 農業論争

- 112 永田幸之助（高橋貞樹）「わが国農業問題と農民運動の諸問題」  
130 星野慎一（関矢留作）「農業問題に関する二、三の論点について」  
143 榎田民蔵「わが国小作料の特質について」  
176 野呂栄太郎「榎田氏地代論の反動性」  
191 榎田民蔵「河上博士に答う——併せて野呂氏へ」

### 第4部 封建論争

- 202 榎田民蔵「代金納は現物年貢の仮装なりや」  
212 向坂逸郎「『日本資本主義分析』における方法論」  
236 坂本三善（鍋島茂雄）「日本金融資本の特質について」  
249 立田信夫（井上晴丸）「半封建的農業分壊の日本の特質に関わる試論（その序）」

解説 —— 日本資本主義論争とは何であったか 河西 勝 263  
ブックガイド 311

……第一次大戦の衝撃の後の世界にあっては、動乱だけが予期されるべき唯一のことであった。旧秩序は消滅した。新しい秩序が生まれたとしても、それは、大戦以前の世界が理解していたものとはまったく異なっていた。伝統的な法や道徳を捨てた思潮が、羅針盤なき世界の漂流について不安をかきたてた。世界を自分の手元にひきもどそうとした旧い正統的権威の側にも新たな躊躇があった。一九一八年後の世界は、十九世紀の人間行動を説明した三人のドイツ人の思想を継承した。マルクスとフロイトは、宗教的衝動は空想にすぎないとみなし、ニーチェは、最大の事件は「神が死んだ」ことであると書いた。大戦

における宗教的衝動の崩壊は、巨大な空白を後に残した。現代史は、この空白がいかに満たされるかというこの歴史にすぎない。ニーチェが、「権力への意志」とよんだものこそ、現代人の行動について、マルクスの経済的利害やフロイトの性の根源的衝動よりも、もっともらしい説明をあたえる。旧秩序の終焉のもとで、通俗的イデオロギーが宗教的信念にとつてかわった。「権力への意志」は、人間支配への満たされざる欲望とともに、どんな宗教的拘束力も禁じえないような新しい救世主を生み出した。

(P・ジョンソン「現代世界」より)

A・スミスは、資本主義の秩序と進歩の側面を理論的に構築した人物。それにたいして、K・マルクスは、資本主義の無秩序を分析し、その究極的崩壊を診断した。M・ケインズは、資本主義社会の自動調節作用を否定することにより、国家による資本主義の救済策を根拠づけた。この点でケインズは、自由放任論のスミスとも自動崩壊論のマルクスとも決定的に対立する。サローとハイルブローナーの『経済学』は、経済学はもともと資本主義の運命を研究対象にするという正当な問題意識にたつて、以上のような三大経済学者の関係の見取り図を描いている。この理論的系譜の整理はとても興味深い。ここでは、スミスやマルクスによって、またブルジョアの立場や社会主義イデオロギーにたいする学問的批判をつうじて純粹資本主義論を確立した宇野弘蔵が知られていない。そのために、それは通俗的見解を脱するものではない。宇野の純粹資本主義論は、資本主義社会にたいして、経済の自動調節作用と自由放任による発展を大いに認め、国家の救済によらないその自立的存在の歴史的根拠を証明した。資本主義における自由と平等の社会関係は、どんな社会形態にもつらぬかれる経済原則の商品・貨幣・資本という物による私的社会的実現であり、資本主義社会の存立の究極的根拠もそこにある。これは逆にいえば、物に転倒された社会関係としての市場法則によらないで社会の目的意識によって直接的に経済原則を実現する可能性において、資本主義を超える社会存在の主張を根拠づけることになる。このような理解からすれば、ケインズによる「修正資本主義」の主張や、その主張を事実上金本位によらない「貨幣」の管理によって実現した第一次大戦以後の列強の経済政策は、もともと資本主義の救済策をなすものなどではない。それは、生産の自由による資本主義の原理を

失つて肥大化した「市場経済」の自由でも平等でもない反社会的な影響にたいする国家社会の側からの自己救済的組織化—それが成功するかしないかは問はず—以外のなものでもないことになる。これは明らかに相当に意識的な社会的人間の行為であり、ここにブルジョア国家の範囲を超えて大衆の権力とイデオロギーが発動し第二次大戦に至る根拠もあつた。そういう現代社会のありようを「資本主義」や「社会主義」に還元し、歴史主義的に資本による法則的發展のうちに閉じ込めてしまふわけにはいかない。このように宇宙の純粹資本主義論は、世界史的に第一次大戦をもつて資本主義の最高の發展段階が完了することを明らかにした。大戦以後の権力的な国際関係や世界政治の發展は、資本主義に本来的な自由主義的世界システムがもはや歴史的に存在しえないことにその根拠を有している。農業問題など世界經濟問題は各国間の政治とイデオロギーの権力的対立によつて発生したもので、その解決は各国間の利害調整と妥協を通じて目的意識的になされる以外になつた。かくて現代は、共有制を否定して成立した資本主義的私有制をグローバルな共有制によつて再び否定する世界史的段階にあるということになる。前者の歴史的移行と後者の否定との本質的な違いは、前者が一つの「自然史的過程」であるのに対して、後者は、資本主義的私有制を含む人類前史を總体的に克服していくことを社会が自覚的に課題にしていることである。ここに宇宙の純粹資本主義論はマルクスの『資本論』を超えて、その唯物史観と「科学的社会主义」を批判的に生かすことになる。「歴史の終焉」を単にイデオロギー論争の復活としていうのでないとすれば、資本主義が終焉した第一次大戦をその画期とすべきである。歴史を終えた現代世界を創造することにおいて、大戦以後の大正・昭和の「過去」にわれわれの現在と将来を読み取ることができよう。その点では、戦争と内乱から生まれたレーニンのプロック「社会主義」もそれを發展させたスターリンや毛沢東のマルクス・レーニン主義も現代を現実的に切り拓いてきたという点で、少なくともケインズ主義と同等のイデオロギー上および権力上の根拠をもつている、またはもつていたというべきである。日本におけるマルクス・レーニン主義の發展もまたそれによる日本資本主義論争も、同様である。しかしその現実的根拠をもつということ、それが正しいとか批判を許さないとかいうことではない。多くの人がこのことを混同している。一九二〇—三〇年代の軍国主義日本の經濟的社会的危機にたいして封建制可否かを、あるいは資本主義の發展の程度を争つたにすぎない日本資本主義論争は、大衆の自覚的な社会的創造を、歴史上の物の法則に押し込めて権力的に利用しようとしたりその科学(的)社会主義によつて、大衆に忌み嫌われるようになったのである。そのことに現代マルクス主義はなお気がついていないようにみえる。

(河西勝)

## 凡例

一、本双書全31巻は、NRK出版部が、社会評論社、クライシス東中野事務所、Nアトリエ、ゆうプロジェクトの協力のもとに編集・制作する、近世・近代日本三百年間にわたる生きた思想の記念碑的なアンソロジーである。

一、全体的な編集企画には、編集委員会（いいだもも、今井清一、小田切秀雄、加納実紀代、鈴木裕子、寺尾五郎、永畑道子、降旗節雄）が当たった。

一、各巻の編集・執筆には、三十四名にのぼる各巻責任担当者が全力をもって当たり、かつ二年を越える編集・執筆者会議における共同討論の成果を十二分に反映した。

一、全巻の校閲には、編集委員会代表いいだももが当たった。

一、各巻編著者が構成した本文テキストの底本は、各々編著者自身による脚注に明記されているとおりであるが、必要に応じて編集部・校閲者による他本との照合・校訂を経ている。

一、現代読者向けのアンソロジーとして、本双書は基本的に、常用漢字、現代仮名遣い、現代式標示法を使用するとともに、難読漢字については適宜開くかルビを施した。ただし、編著者の方針により次の例外を認めた巻がある。

古文は原則として歴史的仮名遣いを使用した。ただし、編著者の方針により現代仮名遣いに直したものも含まれている。

漢文は原則として読み下し文としたが、編著者の方針にしたがい、原文・読み下し文並記、あるいはまた現代語訳としたものもある。

一、現代読者のため、原文にはない小見出し等を付けたものもあるが、その場合には「」内に納めて原文との区別を明確にしてある。

一、本双書は、著作権（没後五十年まで）の現存する「生きた文献」を多数収録しているところが、一特色となっている。著作権所有者との交渉は、荃日本著作権協議会発行の著作権台帳その他にしたがって鋭意努力したが、事柄の性質上、本双書収録文献のうち若干、著作権所有者の消息不明、連絡途絶のものも含まれている。（恐縮ながら当該文献にお気付きの関係者はご一報を賜りたい。）

一、全31巻を通して、印刷・製本には日本製版㈱が、用紙手当には木邨紙業㈱がそれぞれ責任をもって当たる。

# プチ・帝国主義論争

第一部

高橋亀吉

「日本資本主義の帝国主義的地位」

猪俣津南雄

「資本主義日本の帝国主義」

野呂栄太郎

「『プチ・帝国主義』論批判」

高橋亀吉

「現段階論の諸迷説に止めを刺す」

## 高橋亀吉

### 「日本資本主義の帝国主義的地位」

#### 1 問題の解決を必要とする理由

帝国主義国としての日本資本主義の地位ははたしていかなるものであるか、ということにいま、私が特に問題とするには、少くとも二つの大きな理由がある。

第一に、云うところの「資本主義最後の階段としての帝国主義」<sup>(1)</sup>は、これをそのまま、日本資本主義に当てはめることができるかどうか。もし、当てはめうるとして、その程度いかに。という問題の解答いかによつて、我が無産階級運動の綱領、政策、戦術といふがごときものは少からず左右せらるべきである。にもかかわらず、これらの点が、これまでハッキリと研究せられていないかのよう思われること。

第二に、もしも、被帝国主義国と帝国主義国との間に無産階級運動の色彩に差がありとするならば（そして後述することくこの間には多大の差がある）日本の無産階級運動は、はたして帝国主義国としての立場において進むべきか、はたまた、被帝国主義国としての立場において進むべきか、少くともむしろ被帝国主義国と利害を一にするプチ・帝国主義国<sup>(2)</sup>として進むべきか、ということがこの際我が無産階級運動上重大問題である。にもか



●高橋亀吉（たかはし・かめきち  
一八九一—一九七七）

山口県徳山の小さな和船造船業者の長男として生まれる。幼くして左足が不自由であった。一九〇六年、十五歳の時に、商人になって身をたてることを決意、大阪の袋物問屋に丁稚奉公にでた。一年後、おじを頼って北朝鮮城津にわたり、一年末まで、居留日本人や在鮮守備隊への日用品の用立てなどしていた二田商会で、店員として働いた。大商人を志し勉学の必要を痛感していた高橋は、早稲田の通信卒業試験にパスし、ついで一二年に早稲田大学商科予科（中学を卒業していないので特殊生）の入学試験に合格したため、東京に出た。特待生として授業料免

かわらず、この点がほとんど研究せられることなくして、我が無産階級運動は、少くともその理論の根拠としては、漫然と、帝国主義国としての立場において進みつつあるかのごとく看取せられること。

まず第一の点について説明せんに、いわゆる「資本主義最後の階段としての帝国主義」と云う場合の「帝国主義」は、資本主義が「自由競争」から「独占」に転じた場合に起る、一定の型を備えた「侵略」であつて、単なる「侵略」でないことは、のちにも詳述するように、明らかなことである。しかり、この一定の「型」を備えているがゆえに、そしてその「型」は資本主義の最後の発展形態であつて、その形態それ自身、資本主義を破毀して、社会主義経済への萌芽をすでに生長せしめつつあるがゆえに「資本主義最後の階段としての帝国主義」ということが結論せられるのである。

我が国における多くの左翼理論は、右の「帝国主義」論からして、ただちに次のごとき結論を引き出すのが常である。いわく「日本は帝国主義国である。日本の資本主義はすでに帝国主義時代にはいつている。であるから、日本資本主義はすでに崩壊の過程を過程しつつある」と。なるほど、私は日本の資本主義がすでに行詰り、崩壊しつつあることはいち早くこれまでいく度か実証してきた。しかしながら、左翼理論の云うがごとく、現に日本の資本主義が「資本主義最後の階段としての帝国主義」にまで発展したるがゆえに日本の資本主義が崩壊に直面するに至つた場合と、そうではなくて、他の原因により日本の資本主義がそれ自身の崩壊に直面するに至つた場合とは、事情はまるで異つてくる。云うまでもなく、その結果として、無産階級運動の方向も戦術も異らざるをえない。思うに、左翼理論の「直訳」の直訳たるゆえんの主たる一つは、右の差異を究めざるどころにある

除をうけた大学商科では、特にセリグマンのものなど経済原論を好んで学んだ。

一九一六年早稲田大学を優秀な成績で卒業した後、久原鉱業会社（日本鉱業、日立製作所の前身）に就職したが、帝大・高商・私大卒によつて昇進や昇級が厳格に区別されることを嫌い、一年数か月で退社、一八年に、あらためて経済記者として、東洋経済新報社（編集長石橋湛山）に入社した。この時から、生きた実際の経済現象から経済理論を構築しようとする高橋独自の的方法による研究が開始された。

一九年から一年四か月にわたり、欧米の経済事情を視察、「大戦による旧秩序の動揺と、連革命との両面から、各国ともに社会運動のあらしのなかにたち、大きなストライキが続出していた」ことに、深く印象づけられた。イギリスでは当時発表されたばかりのケインズの論文「平和の経済的帰結」を読み、影響を受けた。またアメリカでは、滞米中の片山潜、山川均、堺利彦、猪俣津南

のではないであろうか。くわしくは後においてと直接間接言及するであろう。

第二の点を究むる必要の一は、日本の資本主義が、国際的に見て、帝国主義的階級に分類されるか、ないしはむしろ被帝国主義的階級に区分されるか、そのいずれに分類されるべきかによって、「反動」の危険の性質が著しく異つてくるという点にある。もしも、国際的の日本の地位が帝国主義階級に入るものとせば、その来るべき「反動」の性質は主として純然たる無産階級に対する圧迫という形を採ること、あたかも英国におけるそれのごときものであるが、しかしもしも国際的の日本の地位が、反対に、被帝国主義国の利害とより多く一致する場合においては、その反動の性質は著しくナショナルリズム（国民運動）の色彩を帯びること、例えば支那におけるそれ、イタリアのファシズムのそれ、のごとき危険が多いであろう。なんとなれば、かかる場合には、国民の搾取される苦痛は、自国資本家に搾取せられるところによるものよりも、むしろ、帝国主義国に（この場合単に帝国主義国の資本家のみならず、その労働階級も被帝国主義国を搾取する）搾取せられるところが大であるから、まず、この「外国の搾取」を除去せんとする運動に感染する體質を多分に持っているわけであるからだ。

同じ理由によつてまた、その国が国際的に被帝国主義国たる地位にある場合には、——ないしは準被帝国主義国たるの地位にある場合には——その国の無産階級運動は、多かれ少かれ「国民運動」ないしは「民族運動」的色彩を有するものである。この点につき、レニン<sup>4</sup>は、次のごとく云つてゐる。共産党インタナショナル第二回大会提出、「民族および植民地問題に関する論綱の暫定草案」の中において、

「帝国主義大国による、植民地および弱小民族の一世紀にわたる奴隸化は、奴隸化された

雄、鈴木茂三郎などマルクス主義者と親しくつきあつた。

一九二四年から二年間、東洋経済新報社の編集長をつとめた後、二六年、フリーランサーの経済評論家として独立、以後も、日本経済の分析のために多数の論文・著書を發表した。高橋は、「ブルジョア経済学者」と見なされていたが、在野の経済評論家として、日本資本主義にたいする彼の現実分析と政策的提言は、マルクス主義者に多くの問題を提起した。「日本資本主義いきづまり論」、「プチ帝国主義論」はその代表的なものであるが、農業問題についても、『明治大正農村経済の変遷』（復刻「明治大正農政経済名著集19」一九二七農文協）など、非常に高く評価されている（前掲復刻版の暉峻衆三氏による解題参照）。しかし今にいたるまで高橋経済学にたいする体系的な研究は、ほとんどなされていない。高橋は、アカデミズムや学閥として発展したマルクス主義経済学のもとで、異端視されてきたのである。

一九二六年には、平野力造に日本農



上のレーニンの言葉をさらに力強く実証するものである。

はたしてしからば、もしも日本の国際的地位が、我が左翼理論の盲信せるがごとく帝国主義階級の仲間ではなくて、むしろ反対に被帝国主義階級の仲間に入るべきものでありとするならば、我が左翼今日の戦陣は、この点において根本的に覆されることになるわけである。すくなくとも、多大の訂正を必要とするわけだ。しかるに、後に詳述するように、日本の資本主義は、これを国際的に見れば、なるほど、帝国主義「的」であるかもしれないが、しかし、それはせいぜいのところ、大ブルジョアに対する小ブルジョアのごとき帝国主義「的」国であつて、もしプチ・ブルジョアという言葉にならつて、プチ・帝国主義国という分類ができるならば、日本はそのプチ・帝国主義国の一つにすぎない。そして、プチ・ブルジョアの利害が、大ブルジョアよりもむしろ無産階級のそれと一致するように、プチ・帝国主義の利害は、大帝国主義のそれと一致するところよりも、被帝国主義と一致するところ多く、したがつて、プチ・帝国主義国における無産階級運動に対しては、レーニンの先きに云えるがごとき「洞察を持ち、注意を払うの義務」があり、また、その国民主義的感情に対しても、単に「侮蔑的な態度を」とつて得々としているがごとき小児病を慎しまねばならないわけである。お断りするまでもないが、以上において、私は頭から反動的愛国主義を支持してゐるのではない、ただ、日本の国際的地位に即して考えるかぎり、その反帝国主義運動の中には、必然に国民的運動の色彩の付随することを免かれたい位地に、未だ日本はあるということを指摘しうればよいのである。が、云うまでもなく、それらのくわしい証明はこれをこの小論の今後の進行に待たねばならない。

党系の革命戦略理論を実証的に批判して、日本資本主義論争に火を付けた画期的論文である。

なお、それ以後のプチ帝国主義論争関係の論文と掲載誌は、以下のとおり。へ\*印は、本巻に抄録のもの

高橋亀吉「末期における帝国主義

の変質」(『社会科学』改造社、一

九二七・四)

\*猪俣津南雄「資本主義日本の帝国主義」(『改造』九卷六号、一九二七・六)

\*野呂栄太郎「プチ・帝国主義論」批判」(『太陽』三三卷六号、一九二七・六)

猪俣津南雄「我国帝国主義の現段階の問題」(『社会科学』改造社、一九二七・八)

高橋亀吉「左翼帝国主義論の自殺」(『改造』九卷八号、一九二七・八)

高橋亀吉「左翼一派の駁論は何を暴露したか」(『太陽』三三卷一

〇号、一九二七・八)

野呂栄太郎「プチ・帝国主義者の

## 2 レーニンのいう帝國主義の特徴と日本の資本主義

いかにも、日本は、朝鮮、台湾、南滿州といった植民地を有している。が、この侵略は必ずしも、今日左翼の云うところの「帝國主義」を意味しない。例えばレーニンの帝國主義を祖述したミカエル・パヴロヴィッチ氏は、その著『帝國主義の經濟的基礎』(上田茂)において、次のごとく云っている。

「……ヨーロッパにおける資本主義發展の最初の段階は『國民戦争』をもってその特徴としていた。國民的大國家——生産力がさらに發達し、資本主義がますます生長するために充分な広さと余裕とを与えうるだけの輪廓を有する、巨大な國家形態——の形成こそ、この國民戦争の目的であり、結果であつた。マルクスは一八七〇—七一年の戦争(普仏戦争)がヨーロッパにおける最後の大國民戦争の一であつて、これぞ國民戦争の時代を終結し、ついに一八四八年における『民族問題』——すなわちヨーロッパ諸大國の國民的統一——の實現に導くものであると考へた。我々は一八四八—七一年の時代が、イタリー、ハンガリア、ドイツのごとき大國家の存在をもたらししことを知っている。……帝國主義という言葉は、現世紀の初め、ボーア戦争の当初はじめて使ひ初められたのである。南アフリカの二つの共和國を侵略するためのイギリスのこの戦争は、初めて帝國主義戦争として言ひ表わされた。……そこで、私(パヴロヴィッチ氏)としては、帝國主義戦争の本質と、その國民戦争との差異を明かにするために、最も明快なる(と私自身の考へる)説明を試みることにする。……しからば、この二つの時代——掠奪政策の代表者であるといつて非難せられていたこの鋼鉄宰相ビスマルク伯の政策と、その現代の弟子達の政策との間——

昏迷」(太陽)三三卷一—号、一九二七・九)

猪俣津南雄「泥沼に陥没した「プチ・帝國主義」者」(改造)九卷一〇号、一九二七・一〇)

\*高橋亀吉「現段階論の諸迷説に止めを刺す」(太陽)三三卷一—号、一九二七・一二)

猪俣津南雄「泥沼に陥没した「プチ・帝國主義」者」(統稿)(「帝國主義研究」改造社、一九二八・一—所収)

(1) レーニンの『資本主義の最高の段階としての帝國主義(帝國主義論)』による。

ここは、「最高の段階」というのが普通であるが、高橋は、「最後の階段」とすることに、特別な意味は含まれていないようである。なおこのレーニンの『帝國主義論』については、注(5)を参照。

(2) 「プチ・帝國主義」の「プチ」は、フランス語の petit で、「幼少な」、「小規模な」などの意味、「プ

の相違は奈辺なへんに存するか。その相違は次の点にある。すなわち、今度の戦争（欧州戦争）は帝国主義戦争であるに対し、ビスマルクの行っていた戦争は国家主義戦争であったということこれである」

しかるに、日本の日清、日露戦争、ならびにこれにつぐ朝鮮の併合、等は、まづたく、日本自身の自営のための戦争であり、日本国家が、当時における欧米の併呑から免かれて、独立国としての鞏固きよくな「国家の統一」を期せんがための努力であった。否、欧州戦争中における日本のシベリヤ出征すらも、この立場から云えば、帝国主義的色彩よりも、むしろ、ロシアの復讐戦に備えんとした（それは見当外れであつたけれども）国家統一的色彩のほうが大であつたと云いうる。なるほど、欧州においては、一八七一年において「国民戦争」は終結したかもしれないが、しかし日本からいえば、その戦いの必要は、なお最近までも存在していたことは、これを否みえない。この事實は、日露戦後において成長したる我が青年の容易に看過したがる点であるが、しかし、それ以前の日本人は、文字通り、今日支那人が体験しつつかあると同じ体験の下に「臥薪嘗胆がしんしょうたん」して白人の圧迫に抗してきたのであつた。要するに、日露戦争までにおける日本の領土侵略は、ビスマルクがアルサス・ローレンをフランスから奪取したと同じ意味における「国家統一運動」であつて、今日云うところの帝国主義運動の範疇はんちゆうに入るべきものではない。もつとも、その後の日本に帝国主義国たらしめる野望あり、そのために努力もした、ということとは明かなことである。が、しかし、それは要するに、日本が帝国主義国の「候補者」に立つたと云うまでであつて、現実に「帝国主義国」になつたことでは決してない。この点を混同すべきでない。

チ・ブルジョア」の「プチ」の場合と同じである。「プチ・帝国主義」とは、まだ帝国主義に成熟していない資本主義というほどの意味である。

(3) ここで「多くの左翼理論」とは、特に、ドイツ留学からマルクス主義理論をもちかえり、当時、左翼戦線で一世を風靡していた福本和夫の主張（福本イズム）をさす。福本イズムは、唯物史観による独特な唯物弁証法の解釈、マルクスの『経済学批判』による下向「上向法の経済学方法論、没落期世界資本主義に合流し急激な没落過程にあるとする日本資本主義の急激没落論、それと結び付いた革命組織論および運動論としての「分離—結合」理論から成り立っていた。

福本イズムは、無産政党運動の分裂を促進するとともに、一九二六年十二月に再建された非合法共産党の理論的支柱となつたが、二七年二月、コミンテルンでブハーリン（二七年テーゼ草案）によって、党組織論である「分離—結合」論が、狭小なセ